



クマと人を守るためのルール

デナリ国立公園に学ぶ



広大なデナリ国立公園

野営のためのレクチャーで学ぶ

デナリ国立公園でもヒグマ（現地ではグリズリー）は特別な存在であった。バックカントリーで山に入る利用者はグリズリーを含む野生動物に十分配慮して行動しなければならない。バックカントリーで野営するには国立公園の入口にあるバックカントリー・インフォメーション・センターで許可（パーミット）をもらう必要がある、そのためにはセンターで申請した後、レクチャーを受講しなければならない。自然環境



バックカントリー・インフォメーション・センター

を守るためのルールはもちろん、グリズリーやブラックベア（アメリカグマ）、ムース（ヘラジカ）、グレイウルフ（ハイイロオオカミ）に遭遇した際の対処方法を学んだ。スタッフからは、他の動物はそれほど難しくないがグリズリーは状況に応じて対処方法が変わるので難しいと説明された。「ブラックベアは強気でいけば大丈夫よ!」と言われたが、こちらとしては異国のクマに対して強気に接する勇気（もしくは無謀さ）はないのでどちらにも近距離遭遇したくない。遭遇回避の方法は日本のクマと同様、音を出すことだ。野営する際はクマ対策として、食料の保管場所とテント設置場所、炊事場所をそれぞれ50フィート以上離して三角形に配置する。食料やゴミの入れ物としてベアカン（クマ対策容器）を借りることができる。

シャトルバスから見たグリズリー



デナリ国立公園

設備だけではなく、そこで働く人たちにも目を奪われた

昨年7月、アメリカ合衆国アラスカ州を旅行した。実に15年ぶりの海外旅行であった。アラスカでの目的地の一つはデナリ国立公園で、前から野生動物の楽園とも言える彼の地でバックカントリーをすることが憧れであった。アラスカやデナリの話は以前から周囲の人に聞いていたし、星野道夫氏（故人）を代表する著名人の書籍や写真集でアラスカの自然やそこに住む人々、野生動物についての知識は得ていた。そしてデナリ国立公園では自然を守るための利用制度が導入され、厳格に守られていることもさまざまな報道で知っていたし、何かにつけて日本の国立公園の現状がそれと比べられているのを目にしていた。

文・写真◎能勢 峰
のせ・たかね/1978年生まれ。宮城、岩手、長野各県を経て2009年から北海道に移住。公益財団法人知床財団所属。主にヒグマとエゾシカの対策に従事する。



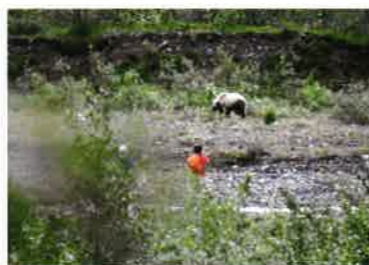
野生動物から離れるべき距離を記した看板

野生動物と共生するためのルール

国立公園の各所に看板が設置してあり、危険性のある動物と離れるべき距離が明記されていた。ムースとグレイウルフからは25ヤード（23m）以上、クマからはなんと300ヤード（275m）以上離れるように書いてあった。偶発的な遭遇は仕方ないとして、クマを認識してからその距離以内に近づいたらルール違反になる。クマの写真を撮りたい人にとって275フィートは絶望的な距離であるが、クマと人が保つべき距離がルールとして明確に示されている以上、ビジターは遵守しなければならぬ。クマの注意看板には「Please help protect bears and humans



クマの注意看板



デナリでもルールを守らないビジターがいた

by following these rules.」と書かれていた。つまりこれはクマと人を守るためのルールだ。動物との距離を保つのは事故を防ぐためという理由もあるが、野生動物に極力、人間の影響を与えないことを理念としている。これらのルールがなぜ必要なのか、日本でたくさんヒグマの死を目の当たりにしてきた私たちには痛いほどよくわかったし、ストーンとふに落ちたのであった。数日間のバックカントリー中はグリズリーに出会うことはなかったが、シャトルバスの中からは何回も見た。バス運転手のマダムがウィットに富んだ口調で解説しながら、しばらく止まってください。広大な荒野の中を悠々と歩くグリズリーを見て、私たちは日本のクマたちを思い出し、知床と比べて優等生すぎるデナリ国立公園をうらやましく思った。

特に知床国立公園はヒグマや大型猛禽類など野生鳥獣の重要な生息地という共通点から、デナリ国立公園とよく比較されていたように思う。以前は「日本とアラスカは違うでしょ」という気持ちがあったが、現地に行ってみて「良いものはやはり良いなあ」という気持ちに変わってしまった。それだけデナリ国立公園では自然環境や野生動物が大切にされ、かつ自然への影響を最小限に抑えて貴重な自然体験（及び学習）を促進するための利用システムが成り立っていた。今回の旅行はまったくのプライベート（新婚旅行）だったわけだが、仕事で国立公園やヒグマなどに関わっているためか、デナリ国立公園の制度や設備、ビジターセンターの格好良い施設と展示、洗練された標識や看板、内容充実のニュースペーパー、明るく誇らしげに公園内で働く人々などに目を奪われてしまった。そしておそらく多くの日本人が抱いたであろう「これが日本の国立公園にもあったらいいのに」という気持ちがよく分かり、現在も知床国立公園が抱えているヒグマ問題に活用できないかと、頭の中は仕事モードになってしまったのであった。